

豆句集



その三粒目  
2013 年立冬号

## 目次

### \*俳句

その<sup>アール</sup>r 井上雪子 …2

嵐と嵐のあいだ 西村 遼 …5

青き匂い 梅津志保 …8

### \*俳句鑑賞

三人でテーマ鑑賞 …12

世界に驚く 井上雪子 …13

気の遠くなる俳句 西村 遼 …14

家一時間を築く 梅津志保 …15

### \*短歌+俳句

秋の論理／冬の手紙 吉野裕之 …16

## 豆句集

豆句集 みつまめ  
2013年立冬号(通巻第3号)



みつまめ

その<sup>アール</sup>  
r

井上雪子

海拔といふ語を過ぎて入梅かな  
穴子并待つてふたりや梅雨の底  
夕焼けやアキレス腱で佇つ子ども  
その<sup>アール</sup>r 海に向かつて開きをり

マンモスの知らざるものに積乱雲  
Pretender キンカン塗つてまだ戦場

つけまつげ誰を救つて遠花火  
蟬たちの頬る尖る敗戦日  
原子炉の高さに過ぎし晩夏光  
風低く赤子は秋かと思ふらし

無愛想なキイウイのごと鮮やかに  
男らの地下足袋秋のまんなか  
脱ぎ捨てのいちにちどこからが月光  
時雨来て身から抜けたり溢れたり  
さよならを聞こえぬやうに雪にした

嵐と嵐のあいだ  
西村 遼

パラソルや出奔の夢見ていたり  
陽炎のむこうへごみを捨てに行く  
今日の秋まずすれちがうキャスター音  
かなぶんの長き飛翔や雨の街

蔦茂る看板のない店舗かな  
マンホール皆つながっている炎夏  
地下の書庫から八月の十字路に  
夏蜜柑踏んで踏んで踏んで敗走は  
一貫性なく立ちにけり青嵐  
嵐と嵐のあいだの月とバス停は

黄昏を漂いへりに捕捉さる  
遠泳の帰り見知らぬ私鉄線  
高圧線追って薄で身を切るか  
鉄塔を登るツナギや虫の声  
アネモネやここもあそこも帰る場所

青き匂い  
梅津志保

そら豆の青き匂いをもらいけり

スリッパを脱いではじまる初夏の家

隣家より炒める音よ梅雨晴れ間

水浴びの馬の背中や夏きざす

新緑や家組み立てる槌の音

鎌倉の簾透きたる廻る鳶

夕蟬は蒼き夜空を登りけり

あたらしき金魚放ちて水動く

ひまわりに日差し染み込む日暮かな

次の手へバトンは渡る青嵐

新涼の川の匂いや橋の上  
口笛は映画のテーマ秋高し  
頂の折り返し点秋の星  
秋の蝶嵐のすき間渡りけり  
月光や抜きつ抜かれつ犬の影  
秋の陽を背中に溜めて歩きけり  
ポケットの鍵の手ざわり冬ともし  
駅員の笛響きけり初冬朝  
傘立てに傘無かりけり冬休み  
ふり返る白き首筋冬の月  
冬の日をたっぷり乗せてバス来たり

## 俳句鑑賞◎三人でテーマ鑑賞

井上雪子十西村 遼十梅津志保

今号では三人が思い思いにテーマを決めて、相互に俳句を探して鑑賞しました。

意外性に富んだテーマで俳句を探すことは、とても楽しい時間となり、観賞や創作に新たな視点が生まれました。

鑑賞のスタート。それは、それぞれの子供時代にありました。

### ●世界に驚く◎井上雪子

いちど嫌だと言えば強情を張り通す、自分の箸でなければお弁当を食べない、大泣きしつつ母親を嘔む。世界は私にとつてよくわからない、気を抜くとすぐにずれてしまう周波数のようなものだった。

・白長須鯨に「おお」と言ふ子かな

——西原天気

こんな凄じいものがこの世にはいるのか。「おお」という一語が余すことなく伝え、「おお」以外に言いようがない思い。一握みの把握とひといきの表現、無作為の勢いが生き物めいて、「おお」と思う。

・をさなごが阿といふとほきさくら咲く

——大石悦子

白長須鯨に「おお」と言ふ子かな——西原 天気  
をさなごが阿といふとほきさくら咲く——大石 悦子  
貝の火のまた燃え上がる春の暮——高野ムツオ  
野を焼くやしづかに空をうつす水——田中 裕明  
鐵を食ふ鐵バクテリア鐵の中——三橋 敏雄  
屋根屋根はをとこみなど棲む三日月——富澤赤黄男  
木の家の鳴るはどの木か春夕べ——宇多喜代子  
黒葡萄その家そののち灯りなし——友岡 子郷  
初雪や積木を三つ積みば家——片山由美子

この世界には目に見えないものにあまた名前がついている。シンクロニシティ、あつと呑む息のような音がして、あつとこつちは瞬時に重なり、その響きは増幅されつつひとつになる。不可解な世界の深さが優しさになる、それがうれしい。

・貝の火のまた燃え上がる春の暮

——高野ムツオ

春の野原、川を流されていくひばりのヒナを助けた兎の子どもは貝の火と呼ばれる美しい珠をもちょう。宮澤賢治の「貝の火」はオパールの特徴をそのまま物語にしたかのようだ。再びの春の暮、その火の燃え上がることを疑わないひとの強さに驚く。驚きながら幸福になる。

●気の遠くなる俳句◎西村遼

人間的なスケールで共感できる、という範囲は実は世界そのものの縮尺からすれば針の先ほどの狭さでしかない。その外側に触れるには、言葉の力が必要だ。

・野を焼くやしづかに空をうつす水

——田中裕明

穏やかな風景の中で、火と空と水という自然の基本要素が互いに照らし合い、響き合っている。そういうことを感じながらも、人間はただそこにいるだけだ。

・鐵を食ふ鐵バクテリア鐵の中

——三橋敏雄

人間にとって硬く冷厳な印象のある鉄は、バクテリアにとっては浸食し増殖す

るための豊かな平野なのだろうか。確かに息づいているものがあるが、人間的なスケールで共感させてはくれないことが逆に楽しくさえある。

・屋根屋根はをどこをみなと棲む三日月

——富澤赤黄男

そして時には人間の営みも、社会という複雑で奇妙なスケールとして現われる。あの家にもこの家にも、共に暮らすに至った経緯というのがそれぞれ全部にあるのだ、という戦慄がある。

これらの句に共通するのは、通常の感覚では把握し得ないスケールのもので、なお言語化することで感得しようとする意志なのだと思う。

●家―時間を築く◎梅津志保

子供の頃、屋根が片流れて、吹き抜けのある別荘のような家に住んでいた。本を読み、夜遅くまで妹と話をした豊かな時間。今住む家は、丘の上に建つ。階段にあたる西日の輝き、部屋を渡る五月の風の大きさ。いたるところで四季を感じて立ち尽くす。今日も家のどこかで俳句が生まれる瞬間がある。

・木の家の鳴るほどの木か春夕べ

——宇多喜代子

音を探す時は、畳の上に大の字になりたい。心のゆとりと、耳に神経を集中させる時間、春の夕べのあたたかさ。心と体、そして自然と家が一体となる感覚を

味わう。

・黒葡萄その家そののち灯りなし

——友岡子郷

人の暮らしが無い家の暗さ、物悲しさ。灯りを点すという何気無い行為が、家に息吹を与えていることに気がつく。家から町から、人が立ち去る背中が影絵のように浮かび上がる。

・初雪や積木を三つ積みば家

——片山由美子

初雪ならば、外出をあきらめて、家の中の時間を楽しむ。家の中に居て、積木の家を築く。考えてみると楽しく、穏やかな時間。積木のぬくもりを感じながら、豊かな時間の流れに身をおく。

# 秋の論理／冬の手紙

吉野裕之



雲を連れ幸せそうに帰ってきたプラムを買いにいったる妻が

木の卓に秋の論理の美しく

十月のゼブラゾーンのなまなまと

新しく秋の日暮のありにけり

ほんとうのことをいいたり目の前の人に見つめられたり

しまはれて冬の手紙となりにけり

香ばしいパンかもしれないぬ冬日和

信じればいいのに裸木のごとく

「俳句鑑賞」出典一覧

- ・西原天気『けむり』（西田書店、2011年）
- ・大石悦子『有情』（角川書店、2012年）
- ・高野ムツオ『蟲の王』（角川書店、2003年）
- ・田中裕明『先生から手紙』（邑書林、2002年）
- ・三橋敏雄『真神』（端溪社、1973年）
- ・富澤赤黄男『天の狼』（旗艦発行所、1941年）
- ・宇多喜代子『記憶』（角川学芸出版、2011年）
- ・友岡子郷『雲の賦』（角川書店、2005年）
- ・片山由美子『香雨』（ふらんす堂、2012年）

豆句集



豆句集 みつめ

井上雪子

梅津志保

西村 遼

Producer \* 吉野裕之

このファイルはホームページ配布版のため、  
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2013 年立冬号（通巻第 3 号）

2013 年 11 月 7 日発行

発行所

みつまめ工房

<http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）